關西大學新報

発行所
関西大学新報社
大阪市大淀区長柄中通２
電話(35)２０７２
発行人　千神　国夫
編集人　吉田　[illegible]
（一部10円）

古本全般売買
天牛本店
南区道頓堀中座前
電話(271)二七五八番

25日に自治委員会

今年度最後の自治委員会は、来る二十五日に開かれることになった。議題は、代行執行委員長、三十八年度選挙管理委員の選出をはじめ、授業料闘争の経過報告などが予定されている。今年度後半は委員の出席が悪く、ほとんど定足数不足で流会が続いていただけに、各委員の自覚が望まれている。

―論　説―

学生運動の課題

わが国が帝国主義への移行を昨年ほど強くおしすすめようとした現象は歴史的にかってみなかったほど強力なものがある。

それはまた、池田政府による国家的重要政策としての高度経済成長とそれに基づく「国づくり」「人づくり」思想が打出されきた背景として、わが国資本主義体制強化への足がかりとしてであり、その一っとして内面的には資本主義に適応する人間像を創りだそうとし、外面的には日韓会談など一連の政策がわが国資本主義強化のあるいは基礎固めの意図を物語っている。

また一九六二年のこれら池田政策への新聞の論調は、貿易自由化対策の一つとして日本が資本主義社会内における確固たる地位を築くべく、いわゆる企業の整備強化の一つとして労使の協調、設備投資などによる合理化を行なって企業の発展をもたらすことは国際収支の回復にむかっての「及第点」である、として池田政権の安定化を望んでいるものである。従って新聞におけるその論調の根底は資本主義体制の強化であり、これに基いて大企業の安定とその確立を目的として激動する労働運動に対する経営者側の強化とそれに対応する労務管理政策を望んでいる。

その一つの例としてさきに関西経営者「白浜セミナー」について朝日新聞が連日にわたって「特集」をこころみ、経営者の望む人間像などについてのキャンペーンを行なったのは注目に値するところであるが、それは資本主義的思想のもとで打ち出されてきたものであり、マスコミがいわゆるその立場を明らかにしてきたのは安保闘争後、特にその傾向が著しく発揮されている。

かつての世論の動向に先進的役割りをはたした新聞界が今度は資本主義へのイニシャチィブをとり、自らの手によっこ報道管制をひき〝努力反対〟〝議会の正常化〟という美名のもとに社会主義運動なかんずく大衆行動の動き、その内容について全く無視する立場か、あるいは経営者感覚によってこれをみつめようとしている。その一つ一つの例は枚挙にいとはないほどである。

たとえばキューバ事件や日韓会談などのわが国政治指針に重要な影響をもつこれらの報道については、政府のその主張と同じ角度からみつめ、主張をくり返してきたものであるが、これらに対する大衆運動への評価は反対のための反対といううけとり方に終始した。

現在執ようなまでに行なわれている憲法改悪作業の積極化、民意を無視した日韓会談理想を進めつつある教育政策このように独占資本の合理化計画を統一的に全体的に推進される過程において労働者階級への圧迫反対運動への強圧となってはねかえってくることは想像に難くない。そのことは社会構成の一つである学生層にも反映し、ひいては教育政策の一つとして学問の自由をも侵すことになりかねないのである。

現在における学生の地位は特に資本主義の発展したわが国においては社会における学生の地位は低いとされているが、学生自身においてもその精神的独立性を欠く傾向が一般的にみられている。したがって今日の社会において労働者の持つ連帯的意識からきりはなされ、企業中心に再編成されるわが国の過程のなかで教育や学問を再編成されることにより大きな監視化の下におかれた学生はますます職能中心的な人間形成を強制され、人間疎外への道におちいってくるであろう。

その結果、就職後における彼らの人生は、カレッジライフの発展として伸ばされず、いわゆる管理者としての立場にたって行動する傾向がある学生運動が四十年来の長い歴史をもつが、その実践のなかできたえられ卒業後においても社会運動に献身する指導者はきわめてまれである。

そういった意味から学生運動に対する評価の一面として単に学生だから等として社会的に甘受され、あるいは軽視される傾向があるのではなかろうか。

最後に、今日われわれ自身なさなければならない課題は多い。

その任務として学生に当然要求されるものであるが、大学における真理の探究とともにそれに基づいた正しい行動であると信ずる。今日の酷しい情勢の中での学生運動は労働者を中心とする巾広い連帯のなかで実践しなければならないし、先進的役割りをはたしたとしても決して浮上ってはならないのである。

現代学生生活の周辺をさぐる

四教授座談会

深刻化する生活の喪失

大学へ侵入した大衆文化

中井　今日は現代の学生生活というテーマで、現代における学生生活と過去の学生生活を分析し、その中から現代の学生生活は如何にあるべきかということで話を進めてゆきたいと思います。現在の大学生はいわゆる戦後に育った人たちで、戦前の学生生活というものは直接知らないわけですが、特に現代と過去との学生生活で違っているような点があれば出してほしいのですが、特に高木先生がおられたオックスフォドなどのように古い伝統の上に立ってほとんど変っていない外国の大学と、日本のように敗戦によって世相も大学生活も大きく変化したところとはかなりの相違があると思うのですがどうでしょうか。

高木　どう変ったかというと非常にむつかしい問題ですが、戦前であれ戦後であれ、学生である以上基本的には変るべきものではないと思います。確かにイギリスやドイツの大学というものは戦前戦後を通じてあまり変っていません。日本の大学で戦後変ったことといえば、学生諸君が非常に自由にものが言え、行動できるようになったことではないでしょうか。

一般では新制度の学生は学力が劣るとか、学問に対する意欲が薄いとかいわれていますが、私は必ずしもそうは思いません。最初は私も学生の服装や行動などの外面的なものに捉われすぎていたのですが、学生部長をするようになって昼夜を通じて学生諸君に接してみると、いわゆる戦後派といわれるタイプの学生でも、その考え方はそんな無軌道なものではなく、案外しっかりしたものをもっていて、その意味では昔も今もそんなに変っていないように思います。

中井　昔の大学生は数も少なく能力についても、家庭的な環境の面においても、一般よりは高いレベルの人たちで占められており、その将来もかなり高い地位が約束されていたわけで、その意味ではエリート意識が強かったと思います。

中井教授

ところが戦後は高い教育が普及して、大学の数も増えその意味では、エリート意識もかなり変ってきたと思いますが、その点、鈴木先生どうでしょうか。

鈴木　そうですね、戦前では中等教育以上に進んだのが二十五パーセント以上に増えたことがなかったのですが、現在では高校が六十四パーセント、大阪では七十三パーセントに達しており、大学がその中の三十パーセント以上となっており、その点では飛躍的に高まっています。また、私立との差も一般的にはかなり接近しており、その意味では、エリートとして殆んど考えられない状態に至っています。

そういう状況の中で、大衆文化状況というのが大学の中にも出てきています。

欠陥としては責任を充分とらないで、自分の幸福だけを考え単位をとるのも、極めて目先の目的のためにとるという具合で、非常にタイムリーに問題をつかむが、それが深まらないで、大学生活を終ってしまうというような傾向がでてきているのではないでしょうか。

そういう点で大衆文化と大学の大衆化という現象に対して、それではいけないという意見との間の問題をもう少しこの辺で反省してみる必要が出てきているのではないでしょうか。

高木　確かに昔は、大学に進学するというのは、家族も周囲の人も、家柄上どうしても大学へ進むだろうと思っているような人たちばかりだったわけで、親も大学を卒業さすための学資を前もって見積って、場合によっては田畑を売ってでもそれを作ったものです。

ところが最近入学する学生の中には最初から学生課へやってきて学費貸与の制度などを相談にくるわけです。それだけ大学が大衆化してきたということで、私はこれはよいことだと思います。

不明確な大学の理念

確立したい　新制大学の使命

それからもう一つ、クラブ活動でかなり進歩的な発言をしている人が、会って話をしてみると、自分の生活に対しては、案外平凡なことしか考えていないので面くらうことがたびたびあります。

中井　表面的にはかなり激烈な学生運動に参加している学生が、その内実案外平凡な家庭生活しか考えておらず、それほどつきつめた、激しい革命思想をもっているわけではないというギャップを考えると、学生であるということによって非常に純粋なものを求めるということが一つにはあるのだと思います。ところが一旦社会へ出てしまうと、その枠の中にはめられてしまって、過去の学生時代に考えていたような純粋な行動に出ることはできない。今日の学生はそのことをよく知っていて、学生時代においてのみそうした純粋性をもっていて、卒業してしまうとその純粋性を失ってしまうという傾向があるようで、その点非常に残念なんですが、そうした理想追究に非常に激しい情熱をもちながらしかも現実的なことを考えているというギャップがあるわけですが、その点で辻岡先生の立場から見られてどうなんでしょうか。

辻岡　ちょうど新制大学期は心理学の方では青年中期から後期にあたるわけで、そういう理想と現実とのギャップを半端認識しておりながら、しかし十分ではないという状態だろうと思います。そういう時に理想の方に走りすぎて、政治的には社会主義に走るという傾向は日本のみでなく、外国の学生にもそんな傾向があるようです。

中井　戦前の大学生は社会的にも相当尊敬されていたし、将来も約束されていた。しかしそういう学生は数も少なかったし、その意味で、学生集団というものは社会の中でもかなりきわ立っていたといえるのですが、現代の学生集団は社会集団の中に溶解されて、学生の集団凝集性というものが昔ほど強くなったのではないでしょうか。例えば母校や、学校対学校、あるいは他の集団に対する意識が薄くなって、学生が他の社会集団の中に溶け込んでしまっているという傾向が強いように思えるのですが、その点どうでしょうか。

辻岡　戦前と今日とでは大学を卒業する人口は非常に増えており、それは、また、日本の産業の発展

辻岡教授

のテンポがそれだけの大学卒業生を必要としているわけであり、大学生の特権階級的な意識がなくなったことと共に嬉ばしいことだと思います。従って学生という特殊集団の集団所属性というものが崩壊していくのは当然なことだと思います。

鈴木　この問題で一つは大衆社会状況が出てきて、これを裏の面からいうと社会に溶解して、大学という特殊性が段々とうすれてくるということ、それを更に深くみると、個々の学生は非常にアトム化してしまって、下宿から登校してもやはり集団の一部を構成する孤独なアトムにすぎず、先生とのつながりもできないというような現象が出て来ているわけでこの点は非常に重要だと思います。

中井　この点はわれわれもよく考えなければならないことだと思いますね。学生の数が増えると共に大学の規模も大きくなってくると、学生諸君がよくいうマス・プロになって、鈴木先生がいわれたように、学校の中で学生が自己阻害されるという現象が起って、何万の学生がおりながら、個々の学生は孤独であるという点が学生諸君の悩みになっていると思うのですが、学生部長として高木先生はどうお考えですか。

高木　この点学生部としては頭を痛めています。アトム化と共に学生の自殺というような問題もあります。

サークル活動をやっている学生はまだいいのですが、問題は、何のクラブにも属していない学生をどうしてそのような弊害から救うかということです。それでも、学生相談室などへ来て悩みを打ち明けてくれる学生はまだよいが、それにも来ない学生の補導に最も悩んでいます。全ゆる機会にそうした学生を発見したらその学生を連れてきて、相談に乗ってやるという、いわゆる袖ひき補導という面で、各先生方にもご協力をお願いしたいと思っています。

鈴木　それは、大学生活という言葉があるにも拘わらず、大学に生活がなくなっているのではないでしょうか。昔は学校へ来ると学校外の生活とは別の生活があって、そこで仲間による学生生活があった。今では大衆社会状況が入ってきて、街での生活は楽しんでも大学で生活を楽しむ機会がなくなっているということが、一層大学生活のアトム化を深めているのではないでしょうか。

政治と学問の結合

学生運動に主体性を

中井　学生集団という凝集性がそういう関々戦とか早慶戦とかいうチャンスにしか発揮されないということになって来ているのですね。

鈴木　つまり戦前の大学と戦後の大学は切断されたわけです。戦前の大学は明治から終戦までの歴史を背負って伝統を創り上げて来ていたわけで、そこにはスクールカラーもあったわけです。ところが新しい大学の学生たちは教授も含めて自分たちのカレッジライフを作ってそこでカレッジカラーを創り上げてゆくという努力をしていない、そこまで目が向いていないのではないでしょうか。社会の波に押されて、自分たち独得のものを作り上げてゆくという努力がまだ実を結んでいないと思うのです。これから作るべきだと思います。

中井　ところでサークル活動に参加することが大学生活の上で相当重要な一面だと思うのですが、現在のクラブ活動に参加するのは数が限られていてしかも発展すべきものがある段階まで行くと発展が止ってしまうということがあり、また活動に参加している学生は非常に熱心であるが、それに関係のない学生は全く無縁であるという傾向があると思うのですが。

高木　私の立場では経済的な面でできるだけ援助するように心掛けたいと思っていますし、同時に顧問の先生方ももっと熱心にご指導をお願いしたいと思います。そして活動家をもっと増やしてゆくべきです。

鈴木　もう一つには、大学入試がむつかしくなって家庭では進学のためにはクラブ活動は進学をあきらめさせることだという考えが一般にあり、激しい競争を経て、大学へ入ると、そこでやっていることは実に無味乾燥な暗記ものが多い。大学へ入ってやっと解放されて彼らは何を求めるかというと、それはクラブ活動ではなくて、外へのレジャーに求める。その上社会のレジャーへの誘惑は極めて強く、そこへ入学と共にとび込んでしまうとカレッジライフは決して彼らのものにはなり得ないと思います。そこを最初にどう指導するかということが非常に大切だと思います。

中井　大学へ入る以前に彼らはレーベンを喪失しているとも言えるわけですね。これをわれわれがどう指導して、生の回復をするかということは技術的にも非常にむつかしい問題になりますね。

鈴木　入学の時にやる開講の辞というものももっと大学の雰囲気に入れていくものに改善する必要があると思います。

高木　要するにアカデミックなものの欠亡ですね。

辻岡　私は日本全体の価値基準体系の動揺にあると思います。アメリカの場合ですと、いろいろな種類の教会が、学生のための設備をもっていて、受動的なクラブ活動ですが、そこで広い人間の問題について日曜日に話合ったり聞いたりするというファンデイションが沢山あるわけです。学生が住んでいる地域社会全体が大学と結びついたアカデミックな価値を作っていこうという安定したものがあるわけです。ところが日本では大学が民主化して学生の数は増えたが、その親たちが、子供たちに何をさせたらよいかということを親自身がわかっていないわけです。

また大学の方も旧制度の大学は機能的には大学院大学であったわけですが、現在の大学は大学院大学プラス新制大学であって、その面で大学の理念というのは非常に不明確になっていると思います

中井　新制大学の教育の面で重要な面を占めている一般教育が、学生諸君にも教える方にも充分理解されていないのではないかという気がするのですが、どうでしょうか。社会は文化系にしても理科系にしても高度の技術を求めているわけですが、新制大学ではそこまで行けない。そこで全人的な人間形成ということが相当重要な役目を果すのではないか、そうすると単に教室の授業だけでなくその学問を生かす意味でも、一般教育と関連のあるような精神的な雰囲気を大学の中で形成してゆくことが、われわれの努めではないかと考えます

鈴木　高校で相当の受験勉強をした人の学力は、或る意味では世界一高いのではないかと思うのです大学の方ではそれを一度くだいてしまう位の一般教育をやらなければならないと思うのです。ただその準備ができていない。その意味では深い学問を修めて、しかも新しい科学を身につけた人が一般教育を担当すべきだと思います。今のようなやり方ですと一般教養と特殊講座との区別がつかなくなるというような感じがします。これは問題です。

重要な一般教養課程

総合的人間形成の基礎

辻岡　その点、最近の学問が全ゆる科学の分野の区別が取りさられて統合される傾向にあるわけですから、教養の課題では、そういう学問を総合して見る目を養うことが必要だと思います。

高木　要するに広く価値判断をし、ものを考えるのでなくては大学を含めて社会の進歩発展はないのではないですか。

もう一つ、二部の教育は、本来なら会社が行なうべき教育を大学が代ってやっているわけで、しかもその費用は学生自身が負担しているわけですから、社会は二部の学生に対してもう少し理解をもち親切でなくてはいけないと思います。

鈴木　現在では現場での日常勤務というものが非常に原理的な、基礎的なものに深く入らなければどうにもならないという状態になっています。それを大学の一般教育が満たしているかが問題です。この点二部の学生には特殊な条件があるわけですが、現場でぶっつかっている問題を原理的に解明してくれる講義がなければ、二部の学生は満足しないんじゃないんですか。

高木　学生運動については、私は活動すること自体は抑えるべきではないと思う。ただ学生である以

高木教授

上科学的な基礎の上に立って行なわれることが必要だと思う。

中井　私も学生諸君が政治や社会に対して問題意識をもつことはいいと思う。せっかく学問をしても何が問題であるかがわからないようでは意味がなくなる。その問題性をさぐるためにはその根底にあるものを深く把握していなければならないという点で高木先生のいわれた通りです。

鈴木　運動はやはりその中から新しいものを創造し蓄積するという方向でなされるのでなければ、運動はその場限りでつぶれてしまうのではないかと思います。

辻岡　私は大学の自治には二つがあると思います。一つは学生諸君の学生の自治と、もう一つは研究の自由を守る教授団の自治です。この間には当然一線があるべきだと考えています。そして学生運動が思想のために行なわれるというのはよいと思いますが、政策のための運動もあるように私の目には見えます。

鈴木　政治と学問との結合という点はむつかしい問題ですが、日本の社会の方向を決定するような重大問題が出てきたときに、学生は学生なりにそれ

鈴木教授

に取り組むことは必要になってくると思います。そこで学生と教授とが意見を交換し深めたりすることがなければ大学は社会から離れてしまうわけで、それ自体を非難すべきではないと思います。

辻岡　私は学生の中に政治運動に無関心な者がいても、それはそれでよいと思う。運動に参加しない学生は何ら社会的に貢献していないように見られるかも知れないが、広い視野から見れば必ずしもそうではありません。従って強制的に運動に参加させるようなことはあってはならないと思います

鈴木　運動に参加するには主体性、自主性が必要ですが、その主体性というのは科学的な認識が基礎だと思います。大学は最も科学の高いレベルに迫ろうとする研究の場だから、科学的な解明がなければ、主体性をもてないということを考えると、学問することと、政治運動に関心をもって科学的に突込むことは一致しなければならないと思う。現在の学生運動に誤りがあるからといって全面的に運動を否定してはいけない。政治に関心をもたせることは教育基本法にもうたってあることです。問題を研究し行動もする中から真の主体性が生れてくると思うのです。

辻岡　私は、学生時代だけは、何ものにも拘束されずに自分のやりたいことを自由にやるべきだと思うので、そのために、学生運動が強制されるようなことは好ましくないと考えるわけです。

中井　学生生活に関する問題は非常に多岐に亘って語は尽きませんが、今日はこの辺で……。

出席者

司会
文学部教授　中井　駿二（新聞学担当）
文学部教授　鈴木　祥蔵（教育学担当）
経済学部教授　高木　秀玄（統計学担当）
文学部教授　辻岡　美延（心理学担当）
新報社　平山（37年卒）、川名（文四）筒井（法四）、渡辺（法四）
（A、B、C順）

[illegible]

▼暖冬と長期予報された今年は、あにはからんや豪雪を生み各地になだれや雪おろしの犠牲者が相つぎ、悲惨な状態をかもしだされている▼天気予報は必ずしも当るとはかぎらない、とは定説になりもはや驚くにあたいしないがこう雪害がひどくてはママならぬはおテントウ様などと、うそぶいていられないようだ▼〝天災は人災〟なりとの格言はけだし名言であるといえ早急に何らかの対策を講じなければならないが、そのなかでひとり気を吐いているのが自衛隊であるといえよう▼もっとも、近ごろ災害といえば自衛隊が動員されそのたびごとに彼らの活躍ぶりがレイレイしく新聞紙上に飾られることとあいまって、随分と風当りをやわらげているようである▼とくに今回は三才の子供の生命を助け、孤立した町に救援物資を送るなどはなばなしいものではあったが、福井県で雪害視察中のヘリコプターが墜落するというオマケまでついた▼たしかにお古の兵器をふりかざし高価な戦争ゴッコをするより、災害復旧隊としての任務の方が歓迎されるのは至ごく当然である▼それというのも、近ごろの自衛隊といえば国民にソッポをむかれこの時とばかりと出動するようであるが、応募者あつめにヤッキとなり上野駅や大阪駅などでポン引きまがいの勧誘をして問題をひきおこしたそうである▼しかし何より恐ろしいのは失業すれば自衛隊に行けばいいという観念をうえつけることと、たとえ再就職のためのステップとして入隊するとしても一律に軍事教育されるという影響をあなどることはできない▼その点で政府は常に多数の青年が自衛隊に入隊させる条件をつくり、そこで再教育をするとともに戦力の維持向上をはかるためにあの手この手をもちいているのが現状である▲たとえば最近報道された自衛隊による南極観測、オリンピック選手の養成、その他実社会に役立つ職業訓練をなどという景気いいアドバルーンをかかげている▼そういった意味から近ごろの災害復旧活動が地元民に歓迎されているというニュースは、彼らの存在価値を印象づける一種のムードづくりの役割りをはたしているといえよう▼かって吉田前首相により警察予備隊が発足したが、その歴史は既成事実を着々と形成することにより憲法九条をふみにじり再軍備化を進めてきた▼それと同じ方法により、国民のなかに自衛隊の存在意識をうえつけているのが災害救助活動であり、その活動を評価するあまりに自衛隊を認めるとしたら、あまりにも高い代償となるであろう▼自衛隊は戦争屋としての危険をつねに荷負っているからである。

皆さまの
佐伯食堂
天六学舎新館地下

電気設備工事　設計・施工
富士電業株式会
取締役社長　田中　実
大阪市西区北堀江上通１丁目６５
電話(54)代表０５６４～７・７１４８～９番
営業所　東京・静岡・名古屋・広島・福岡

創業　大正十年
暖冷房　換気
給排水　衛生　設備・設計・施工
株式会社　大阪城口研究所
大阪市北区高垣町一
ＴＥＬ(37)七五七五（代表）
出張所　京都・神戸

株式会社竹中工務店
取締役社長　竹中錬一
本社　大阪市北区堂島中二丁目三〇
電話・大阪(321)代表1251
営業所　札幌・仙台・東京・横浜・静岡・名古屋・京都・神戸・岡山・高松・広島・福岡・八幡

営業品
一般鋼材、二次製品、仮設機材
道路用品、土建機器、鉄工々事
株式会社　小田正商店
大阪市東区紀伊国町九四二八
電話(76)五二六五―八・四一四七番

長びくニューヨーク新聞スト

ニュースに飢えた市民

新聞の恩恵を再認識さす

文学部教授　金戸嘉七

ニューヨークの新聞ストライキは、昨年十二月八日からはじまっていまだに結末にいたらない。最近多少の動きもみられるようであるが、ガッキと四つに組んだままで、解決はもっと先にもち越される形勢である。

この争議は国際印刷労組ニューヨーク支部の、二年間に週一九ドル賃上げの要求と、これにたいするニューヨーク九紙側の、二年間に週九ドル二〇セント賃上げという主張とが、正面から対立しているうちに、ニューヨーク・タイムス、デーリー・ニュース、ワールド・テレグラム、ジャーナル・アメリカン四紙が突然ストに入り、これに対抗してヘラルド・トリビューンやポストなど残る五紙が、自動的に同調する申合せによってロックアウトを宣言したものである。

わが国でも第一次大戦の影響下に大正九年（一九一九）七月、東京で印刷工の組合革進会がベース・アップ、労働時間短縮、公休制実施などを迫ってストライキを企図したことがあった。しかしこの際には経営者側の団結の方が強くてストに対抗するための一カ月の休刊、全職工の解雇をもって応戦その間には切り崩し戦術などもおこなわれて、組合側は五日間の休刊をもって破れ去ったのであった。それでもわが国としては未曽有の新聞界異変といわなくてはならない。戦後には読売新聞のストライキなどもあったが、こうした一社限りのものは別として、全市の新聞が発行を停止するにいたるような事態は、争議の手段としてはこれから後にはない。それは一つには組合組織の相違からもくる。

周知のように、わが国の新聞労働組合の大部分は、総評系の新聞労連に加盟しているけれども、その構成分子はそれぞれの社の編集、営業、印刷のすべてを包含している。これは大正九年の印刷工争議の教訓からして、各社がそれぞれの方法で自社の印刷関係の優遇策を講ずるとともに、横の連けいを切断してしまった政策の効果ともいえる。読売争議のときのゼネストの呼びかけ失敗には、他にもいろいろ大きな原因が考えられるがこのことも預って力があったというべきではあるまいか。

職場を失った編集、営業人

これに反して欧米の場合は建前がちがっている。特にこんどのニューヨークの場合をみても、ストに入ったのは上述のように印刷労組所属の組合員なのである。それがために、職場を失った編集、営業の社員たちは、賃金カットのために生活が窮迫を告げ、豊富な闘争資金の中から支給を受けている印刷工よりも、苦しい状態で右往左往しているとは、これもすでに報道されているところである。それにしても新聞ストの影響を蒙るものはこういった連中ばかりではない。最大の被害者はニューヨーク市民だとの声もある。ケネディでさえ、パリからニューヨーク・タイムスの国際版を航空便で取り寄せて読んでいるそうだが、そんなことのできる人間はかぎられている。

立ち上った印刷労組

工務合理化の問題からむ

デパートに何を売っているのやら、どんな求人先きがあるのやら、あるいはどこでどんなスポーツがおこなわれるのやら皆目わからない。したがってデパートや商店の側も悲鳴をあげている。ラジオやテレビはニュースを増しているがじゅうぶんでない。懐ろのさびしい各社の論説委員たちが、ラジオやテレビに出演して、自分の書いた論説を読みあげてアルバイトをやっているという報道さえある。まったく笑えない喜劇といわざるをえない。このことは同時に新聞を斜陽視していた一部人士の蒙を啓く効能があったともいえる。それにしても印刷労組がこんなにまで強気の態度を持して譲らないのはどうしたわけであろうか。

日本とちがう組合の組織

これについては、わが国の場合とちがう場合の組合の構成が原因しているという見方もある。そうした是非はここで論ずるいとまがないが、要するにアメリカのように、それぞれの分野がそれぞれの横の組合をつくっている状態では、総にみた場合の一帯感が稀薄になることは争われない。その反対に、わが国の現行の組合は、一社としての連帯感は強いが、ご用組合になる危険がないでもない。経営者の論功行賞を、当初から期待してかかるといった傾向さえみられないではない。この辺がむずかしいところであるが、一帯感が薄いところに、それぞれの組合間の意思疎通を欠く面もでてこよう。

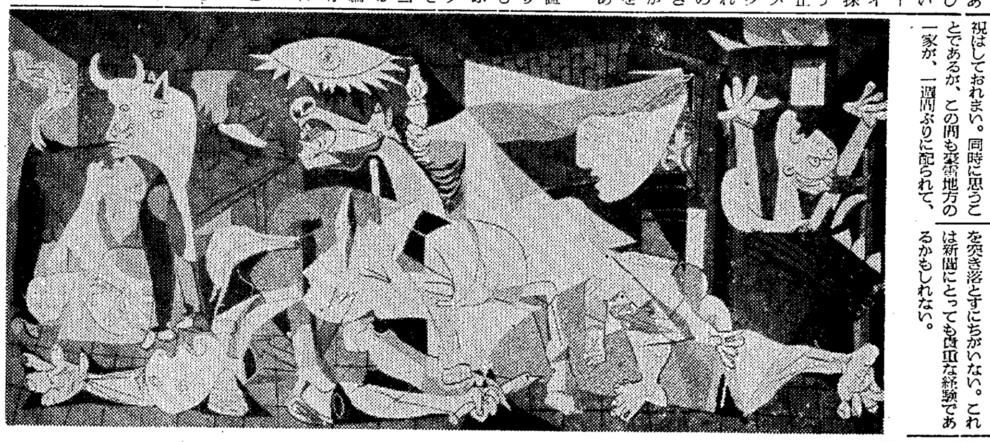
そこでこんどの場合は、編集や営業の組合がつねに中心になって賃金ベースを決定してきたことにたいする、不満が爆発したのだというのである。そういわれるとそうのようでもある。かれらの米国新聞同業組合は、このストが起こる前に八ドル賃上げで妥結しているのである。その倍額以上のものを要求して譲らないところには、ひとつ男をみせてやろうという気持が ないとはいえない ようである。

対岸の火でない工務合理化

ところが、いま一つの問題があることは早晩わが国でも放置しておけないことになるのではないかと思われるが、工務のイノベーションにたいする反対である。イギリスでもファクシミリ方式を採用しようとしたとき、ガーディアン紙の印刷工組合の反対で取り止めになったときいているが、アメリカの活版工程のオートマチック化はめざましいものがある。それが日本にも移入されて、最近そのイノベーションが急歩調で推進されているのだが、こうした傾向が印刷労組員の雇用に大きな問題を投げかけるのは見やすい道理である。

日本ではまだ当分のところ配置転換やその他の措置で、従来通りの人員を吸収していけようが、もともと人間を節約するためにくふうされ発展させられてきた。アメリカのイノベーションである。それが響いてこないはずはない。当面はげしくなることが予見されるこの重大問題の交渉に当って、編集や営業人よりは、印刷工が主導権を握るのは当然だという、これももっともな話である。ベース・アップもさることながら、こんどのストライキの真の狙いはそこにあると、こんなふうにみているものもいる。こういった事情を考えて、始めて今回のストの容易に解決しない理由がわかるような気がする。

とにかく、こんな状態でつづいていると、由緒ある新聞も戸を閉じなくてはならなくなろうと案ぜられている。広告収入だけでも週間七〇〇万ドルの損失だというのだから、手痛い話であるが、イノベーション問題を考えると、日本の経営者も組合員も、対岸の火災視はしておれまい。同時に思うことであるが、この間も豪雪地方の一家が、一週間ぶりに配られて、新聞に目を輝かしている写真をみたが、二カ月も三カ月も、新聞に接しないことは、いくらニューヨークでも、たえがたい孤独感に人を突き落とすにちがいない。これは新聞にとっても貴重な経験であるかもしれない。



ピカソ ゲルニカ展

戦争への怒りこめて

—社会不正に対抗する芸術—

「ゲルニカ」はピカソの代表作品というよりも、近代美術の方向づけをなしたモニューメントとしてもはや美術史上の一大金字塔となっている。

断るまでもなく「ゲルニカ」は一九三七年のパリの万国博覧会スペイン共和国の依頼により制作、スペイン館の壁画に飾られたものである。

この抽象化された、戦争の悲惨犠牲者を悼む作品は、祖国スペインを苦しみと死の大海に沈め込んだ軍閥跳梁、なかんずくフランコに対する憎悪を描き抜いたもので、多くの人々と共感を分ち合っている。

ピカソとニューヨーク美術館の協力で、日本においても開催されたこの展覧会は、この作品の制作過程を作品によって後づけたもので、世紀の金字塔ともいえる「ゲルニカ」を理解する手段として全く有効なものである。「ゲルニカ」の画面は、時代閉塞の部室の暗い白熱電球の下に生き残った、女の指し出すランプの光に戦争の悲劇、残虐を鋭く堀り上げている。

女のランプを中心に左下に幼児を胸に抱き咆哮する母親、その上部にスペイン民衆を形象しようとする牡牛、左の小空間に机の上の涙する家鴨と時代の光線＝電球、電球の真下にはヒン死の倒れかかった馬々は悲鳴をあげ、三角形の舌を出し首をまげている。矢が馬の体を貫いているのだ。

その足の下には戦い死んだ兵士が折れた剣をにぎりしめている体には剣が刺って、馬の後右足の上に倒れている。

暗い外から女の差し出すランプの右下には、逃げまどう女、上部は窓からランプを差しだす、時代の証人の女の顔、右側は燃える家から落ちていく女。この悲劇の追悼画は、これに耐えぬいている牡牛と折れた剣をにぎっている兵士の手元から咲いている、小さな小さな「花」である。

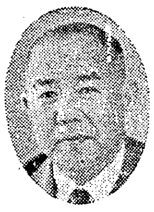
全体的に衝動的で苦悩がまさしくピカソを動したのである。ナチの援助したフランコのスペイン戦争が「民衆と自由に対する反動の挑戦である。芸術家としての私の生涯は、反動と芸術の死に抗する絶えざる闘争の絶えざる闘争の何ものでもない」と明確にその思想を表明し「絵はアパートを飾るために作られるのではありません。…それは社会の不正に対抗する攻防の武器です」と語っている後、強制収容所の犠牲者を記念して描かれた「肉体の墓場」女や子供を虐殺する兵士を機械人形に変えてしまった「朝鮮の虐殺」など一貫して無法な暴力、メカニズムの進行と社会的矛盾の指摘を行なってきている。虐げられているものは女、子供＝弱いものである。平和への願いがこのような形象を必然たらしめたのだろう。

形象はデフオルメされ、単純化されて判りにくいが、時代背景モチーフや時代感覚を知り、名作を煮つめていく道程を確めてみると、あまりの現代性に、二十五年前のこの作品を前に慄然とするものがある。我らにも昨日のことであり、悼むもののない明日のことだ。

ピカソの親友、仏の抵抗の詩人ポールエルアルは「ゲルニカの勝利」を苦悩してうたっている「1茅屋と抗道と野原の中の美しい世界、2火にも耐える顔、寒さにも耐える顔、夜、拒絶にも、侮辱にも、打撃にも耐える顔、…8女たち、子供たちは、春の青葉とまじり気のない乳とそして忍耐の宝を持っている。ひとしくその深き眼の中に、…12人間のためにこそ、この宝は歌われたのだ、人間のためにこそ、この宝は費やされたのだ。…13生きている人間、かれらのためにこそ、絶望は、激しい希望の火を燃えたたせる。もろともに未来の最後の芽を開らこうではないか…私たちはそれに打勝つだろう…」と。

ピカソの「ゲルニカ」を全く適格に説明している。

（ゲルニカ展、2・17日まで京都美術館）



市政に大きい功績

大阪市長　中井光次

ことしの元旦、市長公館での新年祝賀会には、至ってお元気にお見受けいたしましたのに、例年にない厳しい寒さが災いしたのか、その後旬日を出ずして病の床につかれ、お手厚い看護も甲斐なく、遂に長逝されましたこと、まことに惜しまれてなりませぬ。

白川さんの功績は、法曹界、市政界、学界、美術芸術界などきわめて広い分野に及んでいますが、大正十四年市会議員に初出馬して見事当選せられるや、推されて直ちに市会議長の要職につかれ、以来二期八年にわたる議員在職中、終始議長として輝かしい業績を挙げられたということは、市政史に全く他に類のないことで、白川さんに対する信望が如何に高かったかは、この一事でもわかると思う。

白川さんが、市会議長に就任されたのは、東成、西成両郡合併による市域拡張の直後で御堂筋の開通、地下鉄の建設、天守閣の復興、美術館の開設その他大阪が近代都市として生まれかわるいわゆる「大大阪の建設」の大事業が推進され、市政の黄金時代が築かれたのであって、関市長と肝胆相照し、清廉円満な人格と寝食おしまぬ献身的努力で、市会各派の協調を得られ、不世出の名議長として市政の飛躍的発展につくされた功績は、まことに讃えて尽くるところを知りません。

名誉欲もなく、市会議長や弁護士会長の在任期間も比較的短かい関係から、一般市民の間では案外知られなかった白川翁が、このたび従五位勲四等瑞宝章を賜ったことは一市井人としては破格の栄誉で昨年四月、大阪市名誉市民の称号をお贈りできたことと共に、私どものせめてもの慰めであります。

九十才の天寿を全うせられたとはいえ、ほんとに心から尊敬する惜しい人をうしなった。深く哀悼の意を表してやまない。

白川朋吉氏と市政

大阪市会議長　清水嘉市

元大阪市会議長白川朋吉君の御永眠に対し、深く弔意を表すると共に、生前大阪市政に貢献せられた偉大な御功績に対して深甚なる敬意を表し、その一端を申上げることを心から喜びとするものであります。

政治の可否によって国の盛衰興亡が決定づけられることは古今東西を通じての鉄則であります。ところが政治を行う者は人間でありますから結局政治も人間次第ということになります。従って只今国造りと人造りとが同時に唱えられている所以でもあります。このことは地方自治においても同様で、名市長なり名市会議長が出るか出ないかによってその自治体の運命が大きく左右されるのであります。

氏は歴代大阪市会議長中の不世出の名議長でありましたが、そのコンビである当時の関大阪市長がこれまた稀代の名市長で、四十年前に今日の近代都市大阪の基礎を確立された方でありましたから、忽ち二人が肝胆相照すに至ったことは申すまでもなくその出会いは正に運命的という外はなく、天が大阪市の飛躍的発展のため、この名議長と名市長とを車の両輪のごとく本市に与えてくれたことと私どもは衷心より感謝せずにはいられません。

氏は資性英明にして温厚篤実、外面は極めて温和でありましたがその精神には筋金が通っており、稀にみる実行力を有し、人に接するに誠実、事に当っては周到、特に公共奉仕の念に徹し大阪市会議長の外、関西大学理事長に推され市政の進展と私学の振興に大きな貢献をされると共に、終生弁護士を業として大阪法曹界に重きをなし、その他美術家の養成、文楽の保存、郷土の愛護に力を致されるなど市民の福祉増進と社会文化の向上に貢献された功績は実に絶大なものがあります。

[illegible]明治[illegible]香川県観音寺町に生れ、少時大志を抱いて上阪、多くの困難を克服して苦学力行、関西大学と東京法学院（中央大学前身）の学業を卒え、明治三十一年、大阪において弁護士を開業され、爾来名声年と共に大を加え、大正十一年大阪弁護士会長に推され、終生大阪法曹会の大元老として尊敬を一身に集め斯界の向上発展に貢献されました。

大正十四年衆望いなみがたく大阪市会議員選挙に出馬して初当選の栄冠を担い、その最初の市会において市会議長の栄職に推され、ついで昭和四年普選最初の市会議員選挙にも引きつづき当選され、重ねて市会議長に就任されました。即ち氏は二期八年に及ぶ在任中、終始議長の要職にあって、市政の枢機に参画し、天賦の才腕をふるってよくその職務を遂行し、多大の功績をのこされたのであります。

その議長に就任されまするや、まず各派の協調を第一とし、特に同年四月断行された東成、西成両郡合併による市域拡張を真に意義あらしめるため、市会の意志をその御人徳によって建設的に指導する外、御堂筋の開通、地下鉄の建設、美術館の開設、天守閣の復興、中央市場の開場などに名市長の誉れ高い関市長と終始協力一体となり、日夜文字通り寝食を忘れて大阪市政の発展に渾身の力を尽し、特に大阪市特別市制の促進運動を徹底的に推進し、六大都市を糾合してその議長会議を永続的のものとなし、大阪市会にその指導権を確保せしめるに至ったことなどはひとえに氏の不屈の努力と高邁なる識見に加えて円満な人徳によるものであります。

かくの如く氏は無比の名議長として名声を馳せられると共に、市政発展の黄金時代を築き、近代都市大阪の建設に偉功を立てられたのであります。

氏が二期八年限りでいさぎよく引退せられた点も他の追随を許さぬところでありますが、その後も市政界の大元老として、私共市政関係者をはじめ、市民の氏に寄せる欽慕の念は終生変るところなく老来益々その厚さを加えておりました。

二九年大阪市民文化賞、三十七年大阪府なにわ賞を受け今年、最初の大阪市名誉市民となられました。氏の生涯の功績に対し、従五位、勲四等瑞宝章が授けられたことは、その光輝ある生涯を飾るのに誠にふさわしいと申さねばなりません。

以上は市政につくされた偉大な氏の片鱗に過ぎず、関大理事長、実業界、法曹界の偉業と相待って氏の全貌が明かになるわけであります。以上簡単ながらこれを以て氏の功績を称えることばと致します。

白川翁を悼む

白川朋吉氏（八十九才）は、さる二月一日死去された。明治三一年関西法律学校（本学の前身）を卒業され、弁護士会会長、大阪市会議長、本学理事長など法曹・政・学界をはじめ文化方面への功績は偉大なものがある。昨年四月、大阪市名誉市民の称号をけうたのは本一紙三八号で紹介したところである。

母校発展にも寄与

関西大学理事　樫本信雄

白川先生は、私の大先輩であり、恩人である。

先生と郷里を同じくする私は、学生時代から大変お世話になった。私がはじめて先生にお目にかかったのは、関大に入学した時であるから随分古いことだ。先生は、北浜に堂々たる法律事務所を持っておられ、その入口には、元学長[illegible]一郎先生の標札も掲げられていた。先生は既に法曹界に重きをなしておられ、先生の六十年に及ぶ永い弁護士生活中、最も活躍されていた時代である。学生の私には内心、郷里の大先生に対し、せん望の念を覚えた程である。

また、先生は、当時から香川県人会長であったので、私たちの香川県出身の関大生で組織していた関大香川県人会は、先生に常に御無理をいっていたが、先生は、心よく承諾して下さった。先生の郷里の人々の人望は特に厚く、県人会長は、万年会長の観があった。先生は、県人会長のまま亡くなったのである。

白川先生が始めて、政界に出られたのは、大正十四年の大阪市会議員選挙の時である。当時は制限選挙時代で有権者の数も少なかったが、戸別訪問は自由であった。

私も学生ながら戸別訪問の御手伝をしたものである。

先生は初陣で見事当選されたばかりでなく、一年生議員で、市会議長になられた。私は、自分のことのように嬉しかった。私が政治に興味を覚えたとすれば、これが動機であったかも知れない。二回目は、普通選挙になっていた。先生は、勿論悠々と当選され、再び議長になった。議員生活八カ年、その間、引続き議長というのは、私共先生だけではあるまいか。

先生は、中央政界えの進出の勧誘も断られて、あっさり政界を引退されたのである。その進展の美事さは何人も為し得るところではない。

先生が関大理事として母校のために尽されたことは、著名である。戦後、再び理事長として、大学経営の掌に当られたのは、私共後輩が、特に懇望したのである。すでに功成り名遂げて、余生を文楽、美術の愛好者として静かに過しておられた先生には、ご迷惑であったと察せられる。理事長在任中、特に先生が、心身を労された問題の一つは、名神高速道路の学園通過問題である。先生は、反対本部が結成されるや、初代本部長として日夜苦心されたが、その後漸く解決を見るに至り、今秋には完成の見込みである。その時には大学の周辺も一変するであろうと思われる。しかるに、先生がこれを見られずして、亡くなられたことは、現在高速道路の担当理事である私にとって、無限の悲しみである。

しかし、先生は、八十九才の高令をもって、眠れるごとく、安らかに、その輝しき生涯を終えられた。私はいまさらながら、多年のご愛顧を感謝すると共に心から先生のご冥福を祈り度い。

故白川朋吉氏略歴　明治十六年香川県に生れ、十三才で上阪、苦学力行して関西法律学校（本学の前身）から東京法学院に学ぶ。同三十一年卒業以来弁護士として活躍されること六十六年。その間大阪弁護士会長をつとめるなど法曹会の発展に寄与された。大正十四年大阪市会議員に当選、連続二期八年間の議員在任中終始議長の要職をつとめ、大阪市政に大きな功績を残した。のち阪堺電鉄の社長をはじめ、郷里の琴平電鉄などの重役となり、その才を実業界へものばした。昭和二十七年本学の理事長として学術振興にもつとめた。昨年四月には大阪名誉市民の称号を授与された。さる一月三十日死去。二月二日密葬、十二日に告別式が行なわれた。

卒業生記者一筆

尺度の根底築きたい

学友会活動からの実感

卒業を前に四年間の学生生活を思い返してみて、三四年入学して、思い起されることは、学生大会が当時の体育系クラブ員による議場混乱暴力行為などで蹂躙され、学生自治は危機にひんしていたし新入生の夢は大きく崩されていったことだ。

三五年には本学の不当人事事件、久井専務理事は学生の追求に「大学の自治とは、大学の名において社会から与えられたものであって、個々の教師に与えられたものではない。無拘束な自由が許されるものではない」と反論した。

また同時に安保闘争があった。学生の疑似前衛性は、トロの名の下に樺事件さえ飾られようとした。現状からみれば大衆の敗北である。

このような状況は本学でも影響を与えずにはいなかった。学研関係活動の不統一はこれからはじまった。安保の決算はいまも問題を残している。学友会執行部はこの機に文化研究グループから体育応援団グループに移譲した。しかしこの久保執行部は、応援団による新報奪取事件に活動停止処分を行なった。その暮れ授業料値上げ反対闘争があった。学友会史上初の授業放棄二日間、しかし交渉進行中、執行部と学生代表が対立、この闘争に破れた。

三六年、体育弁論関係の戸田執行部は学研、新報社、文化関係の活動予算を三〇％に落し、学友会活動の跛行性にレールを敷いた。現在の学友会活動の低迷の大きな一因がここにみ出される。正しく学生不在の学友会であった。

そして三七年、西庄執行部となって、再度の授業料闘争は西庄委員長を中心に、闘争に破れたとはいえ、三八年秋より天六学舎内に約二千万円の学生会館の建設を勝ちとった。全般的に無気力であったが、一段と正常化への方向に向ったといえそうである。

大学生活は自己を試練する場であるから、深く交友し得るよう、個々の真摯な心構えというものを築くこと、連帯意識、批判精神の確立ということが実感として痛感される。

（川名記）

関西金石文

奇行の中に見える野党精神

一休禅師の行跡に石碑

去来路人

昨年本紙上に掲載した、一休禅師創始、尸陀寺跡に十二月二十五日、写真の如く石碑が建立されたことを御報告申上げる。本碑については昨年九月頃、朝日、毎日、産経、読売各紙に掲載されたが、石碑建立については、大徳寺、一休寺、尚輪寺、大燈寺等一休諸縁の寺及び高槻市長、高槻市教育委員会並びに、出灰の諸氏の協力によるものである。

日本民族の中に千幾百年間も存続して来た仏教の諸寺院の今後の存続については、種々の問題はあるがどのような手段をつくしても存続すべきものでなく、仏教本来の精神に悖る行為をしなければ存続できないものであるなれば寧ろ廃すべきで、そうでないと精神のない形骸だけが残ることになる。寺院というものは僧侶のためのものではなく何らかの方法で社会に益するものでなければならない。

大徳寺も建立された当初、大灯国師の時代には花園上皇、御醍醐天皇の帰依を得て、庄田を下賜され朝庭第一祈禱所となったがそれより百余年後の一休の時代になると、南北六十年の対立抗争の結果、政治経済の変動から天皇も御小松以後は将軍のかいらいに堕し、実権は無く、従って大徳寺を経営し続存せしむるには従前の権力に依存することができなくなった。そして社会は混乱状態であったからこれを運営するには俗的手腕を必要とした。

師、華叟和尚は大徳寺の首座であり、徒門衆の要請にかかわらず大徳寺に住せず、堅田の祥瑞寺で枯淡の生活を送ったのは正法眼蔵以外の俗界の煩わしさをさけたものであろう。

この華叟和尚の下に首座であった養叟は師の華叟の死後に大徳寺の住職となった。この養叟は師の華叟または後輩の一休とは性格を異にし俗界との接触をさけず「禅」を種々の方法で売りつけた一休はこれを非難し罵悪し続けている。一休著自戒集に左のごとき文がある。「養叟和尚、比丘尼、商人、などにかなつけの古間をおしえて得法をさせられ候、今は田楽、囃猿なんとも我は得法のもの也、地獄の話に参したるゆえに地獄にはおちじ、我に参せよと、得法をたてて高言、事の外也、紫野大徳寺はじまりてより以後、かくの如き大悪党の邪師いまだ聞かずまた見ざるや」―この養叟和尚の行き方は混乱の時代に大徳寺を維持する方法として考え出したことであろうが、一休は性格的にかかる方法はなし得なかったが故に大徳寺には止住せず常に野党的に立場にあったのであろう。

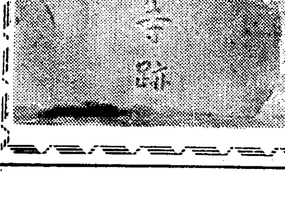
また養叟和尚などが一片の印可の書によって法を相伝することにより生ずる悪弊を見て、一休五十七才の時に次の意味の文書を関係者に送っている。「自分は未だかって一人も印可を与えていない。もし自分の死後、わが法を相続したと称するものあればこれは法の盗賊であり、わが怨敵であるから役人に告げて投獄すべし」と述べている。仏法ではこれを絶法という。この絶法ということは徳川時代の隠者、沢庵和尚も行なっており、大灯国師の嗣法者、宗山敢翁は末後の句に「釈尊より相伝の正法眼蔵は人に付嘱するというものではなく自からがこれを荷担して五十六億七千万年後に出世するという弥勒菩薩の出現するを待とう」と述べている。

この法を相続するということは古い制度を存続せしめその上にあぐらをかき、そして新しいものの出現をはばむ性質のもので、一休の絶法は形式的な紙片に依存せず、実践を尊ぶもので近代思想から見て一休の方が正しいのでないか、これ以外に宗教の未来主義とか禁欲主義、超人間主義に対する近代精神の反ばっは一休にはあてはまらない。一休の歌にこのようなのがある「さとりなば坊士になるな魚くえ、地獄に行って鬼に負けるな」「一代の守本尊たずぬればわれ人ともに飯と汁なり」この歌のどこに未来主義があるか、自戒集には自らの五種行と、一には傾城乱、二には若衆狂、三には酒宴、四には田楽節猿楽節などに尺八、五には〇宣舞、と述べている。狂雲集にも自分の好むものは魚肆、酒肆、淫坊と称しており、禁欲的な行為は山居の時丈け位で、そして交際は天皇公家商人農民と広い範囲にわたっている。一休は僧形の俗人とでもいうべきもので狂雲集に「昨日は俗人今日は僧、生涯胡乱是れ我が能、黄衣の下名利多し、我れは要す児孫の大灯を滅せんことを」

若年の時人生に疑問を持ち一時は自殺しかけたが思い直して、華叟師の下に入門を希望した時は四日も五日も門前に頑張りつづけ華叟師から頭から水をそそいで叩き出せといわれても去らず、こうして入門を許可され、数年間苦辛の末華叟師から釈尊相伝の正法、印可の書を与えられたが、これを地に投げ捨て去り、都会の生活が嫌になると、丹波の山奥にまで住み、大徳寺止住を請われても住まずして、洛南酬恩庵で森女と愛の生活を娯しみ、禅宗がいやになると、むかしは虚堂七世の孫、純一休、いまは法華宗純と名乗り、生きてる間は、虚堂禅師七世の法孫東海純一休と自負しておきながら死ぬ間際には、「誰れか吾が禅を会するや、虚堂来るも半文銭に当らす」―と述べた。

これだけ自由奔放に生き得る者が現在で何人あるか、しかし前述の如く法兄にあたる大徳寺住職、養叟和尚の売法的行為に対してはかしやくすること無く攻撃している。その方法も学者インテリ的な上品なものではなく養叟が天皇に運動して、宗慧大照禅師の諡をもらったことを聞き、宗穢大燈禅師号を賀す、と題し「穢とは穢多な工也、又宗門をけがす也、大焼とは禅師号かなわずば如意庵に火をつけてくらえ、火を入れて国師の法衣えの外寺の重宝どもを焼き捨てんとたくらむふおんあり、故に宗穢大焼禅師というしげのいと申す公家の上郎おうせけるは養叟という唱門知識の禅師号を賜る世なれば穢多なんとも大政大臣に成るへしと悪口あり」

このような人間は近代の学問からあまり生れない。そして権威には屈従せず、前向きで、後世に伝えられる[illegible]行は、釈尊以来の正法を大衆の中に持ち込もうとする結果生れるもので一休に対しては無神論者も反宗教も攻撃を加える余地がない。この意味で一休の前に一休無く一休の後に一休は無いと言うべきである。保守因循の儒学から大塩中斎の如き先駆者が出たのと同じく、俗間を離れた禅門から一休の如き人間を出したことは、日本史的に見て人民解放の思想に厚みを加えるものであると考え、尸陀寺の碑を高槻市出灰に建立したことを報告するに当り、その行跡の一部を紹介した次第である。

（編集者註、筆者去来路人氏は本学工学部就職係勤務。昨年十二月、高槻市郊外の尸陀寺跡に石碑を建立した。）